祝発足 40年 宮城県心筋梗塞対策協議会

ごあいさつ

本協議会は、東北大医学部第一内科教授であった瀬川俊教授の発案により1978年に創設されました。当時の宮城県の急性心筋梗塞に対する救急医療体制は極めて不十分で、24時間体制で患者を受け入れる病院は一つもなかったといいます。こうした現状に適応を期された瀬川先生が県下の病院に呼び掛けたところ、約20病院が参加。現在では、県下で急性心筋梗塞を扱う病院は全ての病院に当たる48病院が参加しています。

過去30年でわが国の急性心筋梗塞患者は高齢化しています。特に女性は80歳以上の歴年高齢者の占める割合が近年40%を超えています。さらに県内では人口密度の高い仙台市内（都市部）と、それ以外の地域（都市部）で比較したところ、ともに一般人口は高齢化しており、それに伴って急性心筋梗塞の発症頻度も増加していました。

高齢化の要因の一つです。ライフスタイルの欧米化の影響もあると考えられます。2000年に県内近辺で行われた調査では、都市部に比べて県域の男性が有意に多い動物性脂肪摂取を示しており、都市における食生活の西化化は都市部以上に急速です。急性期死亡率は救急医療体制の整備と早期冠動脈形成術（PCI）の普及に伴って改善していますが、高血圧や脂質異常症、喫煙などの主要危険因子に対する予防意識の低さが懸念されます。

今後も、本協議会活動を継続することにより、宮城県における循環器病の向上に努めていきたいと存じます。

2018年（平成30年）10月30日火河北新報朝刊
※転載許可取得済み